

ウエーブ

時評



田中 均

世界はどうなる？

たなかひろし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て(株)日本総研国際戦略研究所理事長、(公財)日本国際交流センターシニア・フェロー。

先日、英国で日英の有識者会合に出席して、BREXITを巡り英国はどうしてこんなにも混乱しているのだろうかと思ひ、悲しくなった。私は英国の持つ英知としたたかさを外交官としての行動の原点にしてきただけに、失望は大きい。同じ失望感は今年8月の日本と韓国の有識者会合でも味わった。この30年間、直接・間接的に朝鮮半島と関わり、韓国との緊密な関係は日本の東アジア外交の大前提と想っていただけに、現在の深刻な日韓関係に危機感を抱く。改善の見通しが無いのは西国に存在する強い国民意識によるものなのだろうか。

BREXITや日韓関係だけではない。トランプ大統領の下でアメリカの対外関係も混乱に満ちたものだ。なぜこのような国際関係になってしまったのか何度も自問した。冷戦の時代を中心に、先進民主主義国間の価値判断の基準はそんなに異ならなかったし、国際協調の力は強かった。ところがグローバルイゼーションは中国やインドなど新興国の台頭を生み、先進国の絶対的優位は損なわれ、さらに国内の所得格差と移民の流入が国内の不満を大きくした。現在の国際関係の混乱を生み出しているのは、グローバルイゼーションの結果として生じている国内の分断の

大きさなのだろうと思う。従来良きにつけ悪しきにつけ国内政治を主導してきたのは既成の政治勢力であり、エリートだった。トランプのような破天荒な企業人が米国大統領に選任されると想像した者は多くはない。経済の衰退に陥っていた英国が回復したのは欧州経済共同体(EEC)に加入した(1973年)からだ、その英国がEUから本当に離脱することを予想した人も少なかっただろう。ところが、今日の出来事の背景にあるのは、むしろこれまでの政治には十分反映されてこなかった社会の非エリート層なのだ。彼らは直観に従って政治家を選び、

EUから離脱するという国民投票に賛成票を投じる。その結果として選ばれた政治家がアビールしたと思うのは次の選挙の票田となる非エリート層の人々だ。トランプはマイノリティーに差別的な発言をし、次々と政権幹部の首をすげ替え、大方のメディアを敵に回したとしても、国民の半分に支持されれば大統領に再選される。「ステーツマン・シップ」と言われる指導者としての資質の高さで競っているわけではない。韓国における文在寅大統領の主な支持基盤は86世代(60年代に生まれ民主化を戦い続けた80年代に学生生活を送った世代)に属する市民運動

家だ。そのような分断は日本では存在しないように見える。しかし今日の日韓関係の特徴付けているのは、なぜ日本は低姿勢で外交をしなければならぬのかという、若い世代の意識であり、戦後世代との意識の格差は大きい。国内の分断はこれまでの統治の主体であったエリートたちの合理的な判断とは、異なる流れを生み、対外関係を混乱させる。エリートたちの判断が常に正しいと言いたいわけではもちろんない。ただ、プロフェッショナルで緻密な国益計算に基づかないトランプ的なアプローチがまかり通って行くのは危険だ。合理的計算なく合意なきBREXITが実現してしまうのも危うい。日韓関係を西国の国民感情に委ねてしまうのも不幸だ。そのような流れに対し、プロフェッショナルな観点からの取り組みを強める必要があるのではないのだろうか。